

ニューズレター 目次

1	第29回セミナー（びわこ）開催のお知らせ	1-4
2	特別研究例会「環境社会学・修士論文発表会」の報告	4-6
3	沖縄地区研究例会の報告	7-8
4	事務局より	8

1 第29回セミナー（びわこ・守山）のお知らせ

■テーマ

環境社会の未来ビジョンと地域住民の咀嚼—環境社会学におけるシナリオと対話—

環境先進県と言われる滋賀においては、「環境に配慮したまちづくり」や「新エネルギー構想」「内湖復元構想」「エコミュージアム」「エコ村・エコビレッジ構想」といったシナリオのもとに、地域社会が参画していく動きが盛んに見られます。このような動きの原点には、水に関する市民運動やびわこ石けん運動の歴史が示すように、環境への取り組みが、住民を主体としながら積極的に取り組んだというプロセスがあります。なぜこのような動きが可能であったのでしょうか、地元はなぜ動き出したのでしょうか。当時の「環境県滋賀」「びわこ研究」といったシナリオがどのように描かれ、またそのシナリオがどのように現在咀嚼されて書き換えられてきているのか、その流れをあらためて追うことにより、「環境社会」というシナリオが全国に展開する動きを、環境社会学という立場からじっくりととらえてみたいと考えています。また、「政策」と「理論」という間において、環境社会学はどのような「対話」を持ち得ることができるのでしょうか。あらためて見つめ直してみたいと思います。みなさまのご参加をお待ちしております。

■日時場所

日時：2004年6月26日（土）～27日（日）

場所：滋賀県守山市今浜（びわこ大橋のふもと）

BRC 琵琶湖リゾートクラブ (<http://www.b-resort.co.jp/>)

主催：環境社会学会

共催：滋賀県立琵琶湖博物館・滋賀県立大学（予定） 後援：淡海環境保全財団

■参加申し込み・期限

同封のハガキにて **5月11日(火)まで**にお申し込みください。お手数ですが、50円切手をお貼りください。

■スケジュール（予定）

(1) 6月25日（金）

17:15 JR 湖西線 堅田駅集合（専用バスで BRC へ）
この日、運営委員会、編集委員会、国際交流委員会、研究活動委員会等を開きます。

(2) 6月26日（土）

8:30～13:30 エクスカーション（コースによって出発時間は異なります）

- ①エリ漁体験とツボカキ
- ②琵琶湖博物館の舞台裏
- ③沖島の暮らしとこれから
- ④里山の環境問題と地域社会の対応

13:45～14:45 総会

15:00～18:30 特別インタビュー 「“びわこ” というシナリオの来し方と行方」

18:30～ 懇親会（沖島漁協婦人部による湖魚料理あり）

(3) 6月27日（日）

9:00～12:00 自由報告

12:00～13:00 昼食

13:00～17:15 シンポジウム 「地域の“シナリオ”をどのように生み出すか？」

○ 13:00～15:15 [シンポジウム A]：自然の再生というシナリオ

○ 15:30～17:30 [シンポジウム B]：地域の豊かさというシナリオ

17:40 解散（専用バスで JR 堅田駅へ）

■参加費

一般会員 28,000 円程度（学生・院生は 20,000 円程度）

※ JR 堅田駅からの往復バス代、宿泊費 2 泊分、エクスカーション代、懇親会費、昼食代を含みます。したがって、宿泊数、懇親会参加の有無などにより参加費は変わります。上記は全日程参加の場合の参加費です。

■エクスカーションについて

エクスカーション（フィールド・トリップ）は、下記の 4 コースに分かれます。

①エリ漁体験とツボカキ

琵琶湖の伝統漁法であるエリ漁を、地元守山漁協のご協力により体験していただきます。エリによって獲れた魚を調理して試食させていただき、組合から漁の現状についてお話をお聞きます。早朝出発予定です。なお、悪天候等により漁船が出ないと判断された場合には、試食とお話に切り替えます。

②琵琶湖博物館の舞台裏

「湖と人」をテーマとした琵琶湖博物館は、1985 年にその設置が計画され、1996 年に一般公開されました。自然環境だけでなく、生活環境といった社会科学の分野もおりこまれている博物館です。普段は見ることのできない、展示の舞台裏や研究部などについて、学芸員の方からご説明いただきながら見学します。

③沖島の暮らしとこれから

琵琶湖に浮かぶ有人島の沖島へ通船で向かいます。漁業を中心とした昔ながらの生活や豊かな自然が今も残されていますが、変化の波は押し寄せています。沖島漁協組合長の茶谷さんのお話を聞きながら、「沖島 21 世紀夢プラン」などの取り組みなどをふまえて沖島のこれからの未来について考えます。

④里山の環境問題と地域社会の対応

「里山」と呼ばれ、日本人の暮らしぶりの原風景ともいわれる志賀町栗原を訪れ、人びとがどのような苦悩の中で、次の時代を選択しようとしているのか。「獣害」と「処理場建設」という問題と新旧住民の関係。地元住民の立場から、あらためて里山のあり方を、社会的・文化的背景のなかでとらえ直し、問題提起していきたいと考えています。

どのコースを希望されるか、申し込みハガキに○をつけてください。コースによって若干、費用が異なります。また、人数の関係で、ご希望に添えないことがありますので、あらかじめご了承ください。

■特別インタビューについて

テーマ：「びわこ」というシナリオの来し方と行方」

1970年代～80年代は、日本の環境問題にとっても、琵琶湖についても、人々の思考と行動に大きな転換が生じた時期です。この転換点に立ち会い、“琵琶湖”というシナリオの作成に直接関係されてきた方々をおむかえし、それぞれの立場から、当時の琵琶湖をめぐる状況とシナリオの成立、評価、さらに未来への課題までをお聞きしてみようという企画です。「政策」「自然」「人」という立場からの琵琶湖へのまなざしについてふり返っていただき、当時を直接知らない世代の研究者がインタビューを試みることで、その現代的意義を受け止めていきたいと思えます。

◎司会：牧野厚史（琵琶湖博物館）

●総論：「琵琶湖をめぐる政策・環境史」

◎嘉田由紀子（京都精華大学）

●武村正義（元大蔵大臣・元滋賀県知事）に聞く：「びわこー環境県というシナリオの創成と展開」

◎聞き手：脇田健一（龍谷大学）

●吉良竜夫（生態学・滋賀県琵琶湖研究所前所長）に聞く：「琵琶湖の研究というシナリオ」

◎聞き手：野田浩資（京都府立大学）

●鳥越皓之（筑波大学・元環境社会学会会長）に聞く：「水と人というシナリオ」

◎聞き手：近藤隆二郎（滋賀県立大学）

■シンポジウムについて

シンポジウムでは、「地域の“シナリオ”をどのように生み出すか？」というテーマでふたつのシンポジウムを用意しました。「A：自然の再生というシナリオ」では、自然を再生するという問題につきまして、法制度、生態学、地元漁協、地元NPOというそれぞれの立場から議論していただきます。また、「B：地域の豊かさというシナリオ」では、各地で“エコビレッジ”といった地域ビジョンが提案されていますが、そのシナリオの生みだし方と地域の暮らしとの関係について、具体的な事例や方法をご紹介いただきながら議論していただきます。

テーマ：「地域の“シナリオ”をどのように生み出すか？」

13:00～15:15 [シンポジウムA]：自然の再生というシナリオ

◎司会：牧野厚史（琵琶湖博物館）

●亀澤玲治（環境省）

●池田啓（姫路工業大学・コウノトリの郷公園）

●北村勇（守山漁業協同組合副組合長）

●倉橋義廣（早崎ビオトープネットワークキング）

●鬼頭秀一（恵泉女学園大学）

15:30～17:30 [シンポジウム B]：地域の豊かさというシナリオ

◎司会：浅野敏久（広島大学）

- 藤田知丈（㈱キタイ設計）：「エコ村という構想と生活者としての立場」
- 深尾甚一郎（近江八幡市政策推進課）：「KJ法を用いて沖島の声を聞くということ」
- 上田洋平（滋賀県立大学大学院）：「心象絵図ができるまで」
- 古川彰（関西学院大学）

■第29回セミナー事務局

問い合わせ先：〒522-8533 彦根市八坂町2500 滋賀県立大学 近藤 隆二郎

TEL 0749-28-8315, FAX 0749-28-8570, E-mail rcon@ses.usp.ac.jp

2 特別研究例会・修士論文発表会の報告

2-1, 事務局から

鬼頭秀一（恵泉女学園大学）・土屋俊幸（東京農工大学）・帯谷博明（立正大学）

一昨年度、昨年度に引き続き、第3回の修士論文発表会が去る3月13日に法政大学市ヶ谷キャンパスにおいて開催されました。年度末の忙しい時期であったにもかかわらず、今回は大学院生を中心に60名超の参加があり、8報告に対して終日活発な議論が交わされました。企画および司会を務めた事務局から、総括コメントを簡単にご報告させていただきます。

そもそも、修士論文発表会が環境社会学会の定例行事となった背景には、大学院生を中心に年々会員数が増加していく中で、研究レベルの全体的かつ質的な底上げを学会としていかに達成していくか、という危機意識がありました。とりわけ、修士論文は、博士課程に進学し、さらに研究を深化させていく際の重要な出発点となるべきものです。学会セミナー等での報告や論文執筆を行うための研究の「前段階」として、とくに大学院生の切磋琢磨の機会を提供したいと考えて、昨年に引き続き今回の研究例会を企画しました。

さて、当日の発表についてですが、プログラムでわかるように、発表された修士論文のテーマは多様で、方法論も多彩でしたが、程度の差はあれ、事例をもとにした研究という点は共通していました。多くの発表に見られた課題や問題点を大雑把にまとめると、(1)プレゼンテーションの方法、(2)問題意識、(3)調査方法、(4)依拠する理論と事例との関係（乖離）、が挙げられます。

(1)プレゼンテーションについては、発表者の過半数が、パワーポイント等のパソコンソフトを用いるなど、わかりやすい発表にしようという意気込みが伝わってきました。一方で、わずか15分という時間的制約の中で、修士論文の内容をできるだけ盛り込もうとしたために、かえって報告のポイントがぼやけてしまい、なぜその結論に達するのか、どうしてそのような概念や分析枠組みが抽出されるのかが見えなくなっている発表が散見されました。この点は、(2)や(3)、(4)の課題とも連動しており、そもそもどうしてこのテーマを取り上げるに至ったのかという問題意識や研究の課題が十分に示されていない、調査方法や結論に至る事例のデータが提示されていない、などの研究発表の基本的なポイントがクリアされていない発表も少なくありませんでした。

環境社会学という研究領域自体が発展途上で揺れ動く中、とくに大学院生や若手研究者には、これまでの研究成果の批判的摂取に加え、従来の研究課題の克服と新たな研究視点の提示が求められています。そのような「次のステップ」に早く進むためにも、上記の課題とともに、定まった時間（字数）内で自分の研究の「売り」を、他者が了解できる形で提示する、という基礎的かつ根本的事項は、今後の学会発表や論文執筆の際にも十分留意してほしいものです。

一方で、発言が一部の参加者に偏ってしまうという問題はありませんでしたが、フロアから寄せられた数多くのシビアな質問に対して、慣れない中で、何とかして応答しようとする粘り強い発表者が多く、全体として議論が盛り上がったのは思わぬ成果でした。今回の機会を1つの出発点に、自らの研究の出発点を問い直し、今後

の研究の展開につなげていただければと思います。

最後に、開催校となった法政大学の船橋晴俊先生、茅野恒秀・大門信也両会員をはじめとする法政大学の大学院生のみなさんには、会場の手配や当日の事務作業の面でご尽力をいただきました。改めて感謝を申し上げます。

(文責：帯谷)

2-2, プログラム

日時：2004年3月13日(土) 10:00～18:00

場所：法政大学市ヶ谷キャンパス 大学院棟(92年館)401教室

■第1部 10:15-12:30 (司会：土屋俊幸)

報告(1) 杉浦未希子(東京大学)

「水」に値段をつける意味——灌漑用水における水紛争と政策的解決可能性

報告(2) 高橋品子(埼玉大学)

環境資源とエコツーリズム——沖縄県西表島の事例から

報告(3) 中川加奈子(滋賀県立大学)

無形文化財保全運動における「媒介者」の役割——滋賀県犬上郡豊郷町の江州音頭伝承活動を事例として

■第2部 13:45-16:00 (司会＝帯谷博明)

報告(4) 杉本佳子(法政大学)

原子力政策における意思決定のあり方と市民参加——原子力政策円卓会議とブルサーマル問題を事例に

報告(5) 矢作友行(法政大学)

環境問題の原因究明・対応過程における不確実性のメカニズムと判断の過誤——熊本水俣病問題と杉並病問題

報告(6) 富田涼都(東京農工大学)

「自然再生」の枠組みに関する考察——「人と自然のかかわり」と日常の世界から

■第3部 16:15-17:45 (司会＝鬼頭秀一)

報告(7) 金 潔華(埼玉大学)

環境問題における住民参加——千葉県三番瀬を例として

報告(8) 本田裕子(東京大学)

野生復帰による野生生物の新たな価値創出に関する研究

■全体の講評(嘉田由紀子・船橋晴俊)

■第4部 懇親会

2-3, 参加者による印象記

印象記① 茅野恒秀(法政大学大学院)

外の寒さを忘れさせるほどの熱気に包まれた会場で、嘉田由紀子会長が何度となく発した、「どのような思いで、問題意識を持つに至ったのかを示してほしい」という問いかけを、思わず自らにあててみた、という方が、会場には多かったのではないだろうか。

「スリリング」かつ「暖かみのある」場、という矛盾をはらんだ表現が、修士論文発表会にはあてはまる。裏方に徹しながら、また聴衆として参加しながら、そのような思いを抱いた。

環境社会学会の修士論文発表会は、第3回目である。所属先が毎年会場校をお引き受けしているため、筆者は初回から続けて参加しているが、発表者の数の増加とともに、所属先のバラエティも年々増えているように見受けられる。これも環境社会学という研究領域の量的拡大を示す指標であろう。しかし一方で、共通言語としてあるはずの「社会学」の位置づけについて、ある種の揺らぎが感じられたことも否めない。たとえば、ある発表者のレジюмеにあった「社会学的な視点を提供」というくだりに対して、すでに発表を済ませたある

聴衆から質問が投げかけられた。「社会学的な視点とは何か」というものである。ここまでならばよいのだが、質問には「自分は別領域の研究者なので、教えてほしい」という類の前置きが付いていたこと、またそれに対する回答が首尾よく得られなかったこと（おそらく想定外の質問だったのではあるまいか）が、今も気になるのである。これは発表者と質問者だけでなく、環境社会学を志す院生全体にとって、考えるべき問題であると感じている。

発表方法について総合的に感じたことは、プレゼンテーションソフトの利点であった。配布用のレジュメには、多くのことを盛り込みすぎるのが常であるが、これに対して、十数枚のスライドには、多くのことが盛り込めない。このことが、むしろ報告のポイントを厳選している。こうしたプレゼンソフトの利点を感じるとともに、プレゼンソフトを活用した発表内容の充実化に気をとられて、配布レジュメにもうひとつ工夫が必要、と感じられた発表がいくつかあったのもまた事実である。

ちょうど一年前、同じ会場で修士論文発表会に臨んだ者として、「あれからもう一年」という時間的経過の速さと、自らの研究の進展の遅さ（時間的経過というには筆者はまだ若いはずだから……きっと主たる要因は後者なのだろう）を感じざるを得ない。新たな調査研究のフィールドを開拓しつつも、研究活動の基盤には、やはり修士論文で得られた着想や経験がある。多くの人にとって、修士論文とはそういうものであると思う。多くの充実した発表を通じて、自らの位置を改めて考える機会を与えてくれた発表者、並びに企画担当者に感謝申し上げます。

印象記② 青木聡子（東北大学大学院）

個々の報告の詳細については割愛するが、今回は、活発かつ建設的な質疑応答が展開された報告と、そうでない報告とが、はっきり分かれていたように感じる。その原因のひとつとして挙げられるのはプレゼンテーションの仕方であろう。「報告の際に、どのようにして自分の研究の面白さを聴衆に伝えればよいのか、どうすれば伝わるのか」ということは私自身の課題でもある。今回はその難しさを改めて痛感したわけであるが、同時に、帯谷先生の「フロアの聴衆が報告者の思考プロセスを追体験できるように」というコメントと、嘉田先生の「報告の中では（料理に使う）包丁だけではなく素材の提示を（＝分析枠組みだけではなく分析対象の詳細な説明を）きちんとおこなうこと」というコメントは、この課題を解く手がかりとして印象に残った。

さらに、全体的な感想としては、「環境共存」をテーマにした幾つかの報告の際に「誰のための環境保全か」という議論がフロアから繰り返し提示されたことも印象的であった。この議論の先には、「誰のための環境社会学か」、「環境社会学には何ができるのか」という、環境社会学が抱える根本的な問いがあるだろう。原発関連施設への反対運動をテーマに研究を進める私にとって、この問いは「誰のための運動研究か」、「運動研究者として何ができるのか」という想いと重なる。今回の議論を通じて、いわゆる「よそもの」としてフィールドに入っていく研究者としての、事例との向き合い方を自問させられた。

最後に、これも自戒の念を込めての感想であるが、修士論文発表という新しい世代による報告であったにもかかわらず、対象や問題設定が依然として従来の環境社会学の枠組みの中に納まり、ややオリジナリティに欠けていた気がする。新たな対象の発見や従来の対象のなかでの新たな問題設定といった挑戦を重ね、「師」を越えていくことが私たち院生の課題であろう。



3 沖縄地区研究例会の報告

環境社会学会・沖縄地区研究例会第2回は、2004年2月7日午後1時～6時、沖縄大学にて開催された。連続シンポジウム「方法としての沖縄研究」の一環で、テーマは「学問における実践とは何か——ローカリティ・当事者性の視点から」とし、以下の報告を受け、その後討議をもった。

コーディネーター：家中茂（沖縄大学地域研究所・環境社会学）
 比嘉政夫（沖縄大学・社会人類学）「社会人類学徒としての実践——琉球列島からの視点」
 中村尚司（龍谷大学・民際学）「民際学における当事者性の探求——仲間、出戻りそしてよそ者」
 鳥越皓之（筑波大学・環境社会学）「トラスト運動と神の土地——土地の取得運動と土地の被収奪の歴史」

当日参加者は全体で130名ほど、うち環境社会学会会員12名の参加があった。研究例会の感想を、当日参加した山室敦嗣（福岡工業大学）会員からいただいたので以下に紹介する。（家中茂）

■他者の力を得て考える — 沖縄地区研究例会に参加して

山室敦嗣（福岡工業大学）

学問における実践とは。いつの時代にも問われてきたこの悩ましい問題が、また頭をもたげてきた。社会学でも臨床社会学が提唱され、環境社会学も環境問題の解決への貢献を会則にうたっている。この難問にわれわれは、「理論や知見を現場に応用」「政策提言」というかたちの回答しかもっていないのだろうか。

研究者が現場と切り結ぼうとすればするほど、直面せざるをえないこの難問に対して「別の道」があることを今回のシンポジウムは示している。その道を行くためには、学問という営み自体をどう捉えるか、という地点にまでたちかえる必要があるようだ。

鳥越皓之氏（環境社会学）はいう。「人間が考え、考えから体系的知識を生み出し、生み出した知識を人間相互がさらに考える営み、それが学問である」。そこには本来ならば実践とか役に立つという発想が入り込む余地はない。とすると、学問にとって実践とは、現場が問いかけたもので、学問にとって受け身であり、自己の純粋に考えるという思考に他者が介入することである。このように学問と実践との関係をとらえたうえで、フィールドワーカーとしては他者介入を積極的にとらえたい、と。つまり「現場や他者から学ぶことを重視し、受身性を甘受した上で、自分の中で積極的に切り替える回路を造る道」を選び、生活環境主義というモデルを形成したという。

ここにみられるのは、他者の力を得て考える、という学問のかたちである。中村尚司氏（民際学）もまた、当事者・出戻り・よそ者という三者関係モデルを提示するなかで、他者の力を得て考える学問のかたちを具体的に報告された。

では、こうした学問における実践とは。それは「分野の研究の応用として、ある分析をし、その結果を問題を抱える人に指導したり導くという立場ではない。そうではなくて、私たちが課題を示し、それを当事者たち自身で考えてもらうという、そのような『学問の実践』という考え方なのである」（鳥越氏報告レジメ）。

フィールドワーカーは現場に住む地元の人々の力を得て考える。その知見を、現場の人々が自らの切実な問題を自ら考えるために使う。こうした学問における実践の具体的なひとつのかたちを比嘉政夫氏（社会人類学）のご報告から紹介したい。比嘉氏は、琉球列島文化の地域的特性として沖縄の門中（成員が始祖を共通にし、もしくは共通であるという伝承によって結びついている父系血縁集団）の地域的差異や生成過程の解明にとりくんでこられた。その比嘉氏は実践のかたちについて、地域の講演などにおける現場の人々とのやりとりを例に述べられた。講演の参加者が、家族や親族間の財産や位牌などの継承をめぐる切実な問題にかかわって現在の門中のあり方、たとえば父系継承への偏重や婿養子の忌避などに対して疑問を投げかける。その当事者の疑問に対して、門中制度が確立したのは歴史的に比較的新しく、沖縄でも地域的差異があること、しかも二男への相続、婿養子の事例が見えることを示すことによって答える、と。

ここにみられるのは、社会人類学の研究蓄積をふまえたうえで、長期にわたる丁寧なフィールドワークによ

で現場の力を得て学んだ知識を、現場の人々の切実な問いかけに対して示し、それをヒントに現場の人々自身で考えてもらうという、実践のかたちである。当事者に提言するのではなく、当事者自身に考えてもらう。そのための知識を示す。このような実践のかたちがある。

他者の力を得て考えるという学問のかたちは、現場の当事者自身に考えてもらうことと表裏一体なのだ。当事者自身も研究者の知見を力に考える。したがって、他者の力を得て考えるという学問のかたちは、研究者と現場の人々との関係という点からみれば、両者を二分したまま研究者を一方の世界に安住させるのではなく、両者がそれぞれから力を得て考えるという意味において地続きなのである。

4 事務局から

4-1. 新入会員の紹介 (2004年2月～2004年4月承認分の入会者11名、五十音順)

住所など詳細情報につきましては、追加・訂正版会員名簿に掲載いたします。

- (正) 阿部 利也 (あべ としや) 加古川市役所
(院) 網中 奈美江 (あみなか なみえ) 京都大学大学院 農学研究科 生物資源経済学専攻 博士後期課程
(院) 市原 純 (いちはら じゅん) 東京大学大学院 新領域創成科学研究科 環境学専攻国際環境協力コース
(Council on East Asian Studies, Yale University, Master's Program) 博士課程
(正) 上田 剛平 (うえだ ごうへい) 兵庫県農林水産部但馬高原林道建設事務所
(院) 上田 洋平 (うえだ ようへい) 滋賀県立大学大学院 人間文化科学研究科 地域文化学専攻
博士後期課程 (3年生)
(正) 太田 光雄 (おおた みつお) 広島大学名誉教授
(正) 瀬戸 健一郎 (せと けんいちろう) 草加市議会議員
(正) 千葉 尚道 (ちば なおみち) 生活環境科学研究センター 代表
(院) 中川 加奈子 (なかがわ かなこ) 滋賀県立大学大学院 環境科学研究科 博士前期課程
(正) 藤田 幸史 (ふじた よしふみ) 尾道大学 経済情報学部経済情報学科 教授
(正) 三木 奈都子 (みき なつこ) (有) 水産経営技術研究所 研究員

4-2. 退会者

渡辺直子 松井生子 水間みどり 菅谷隆夫 菅谷隆夫 村上心 榎本和子 杉原左右一 佐々木順一 長峯涼子 葉山アツコ 服部牧夫 (03年度末)

『環境社会学会ニュースレター』

第34号 (通号39号)

発行日: 2004年4月27日

●
JAES Newsletter

No.34

April 27, 2004

●
編集・発行: 環境社会学会事務局
〒060-0810 札幌市北区北10条西7丁目
北海道大学大学院文学研究科 宮内泰介研究室内
Fax: 011-706-4150
E-mail: kankyo@reg.let.hokudai.ac.jp
郵便振替口座: 00530-8-4016
口座名: 環境社会学会
<http://www.soc.nii.ac.jp/jses3/>
